

中世後期の自伝二著

——トマス・ブラッターとブルカルト・チンク——

一

ヨーロッパにおける人間と人間の関係のあり方は一世紀に大きな変化をとげた。それは贈与・互酬の関係から売買の関係へ、農村を中心とする生活から都市中心の生活へ、多くの神々の世界から唯一神の信仰によって組織された世界への転換であり、この三つの大きな変化を軸として公的なものの原理も変貌をとげた。その変化は何よりもまず人間と人間の関係の具体的な日常生活における変化であったから、生活のあらゆる面に浸透してゆき、その変化が完了するのに数世紀、つまり中世後期とよばれる時代の全体を要したのである。⁽¹⁾

阿 部 謹 也

この変貌の全体を見渡すためにはまだおさえておかなければならない分野がかなりのこざれている。そのひとつが文書の問題である。⁽²⁾人間と人間の関係の重要な表現として文書が大きな役割を果たすことになるのは、階層によって多少のずれはあるが、中世後期以降であり、とりわけ印刷術の普及とあいまって宗教改革がひとつの画期として位置づけられるだろう。この問題の全容については贈与から売買への転換を扱った別の論稿を用意しているのでそちらに譲り、本稿においては民衆と文字の問題にしぼって中世後期社会史研究の史料のいくつかを紹介してみたい。

コンスタンツ中世史研究会の「プロトコル」二四五号

(一九八一年四月七日〜一〇日)は『中世中・後期における社会的変動のなかの学校と学芸』と題するシンポジウムをのせており、冒頭でヴェンデホルスト教授が「中世において読み書きできたのは誰か」という短い講演を行なっている。⁽³⁾ヴェンデホルスト教授は、(一)支配者、(二)聖職者、(三)騎士、(四)ユダヤ人、(五)商人について展望し、支配者についてはメロヴィング朝からカロリング朝にかけて支配者の大多数は文盲であり、読み書きができたルードヴィッヒ敬虔王、オットー三世、ハインリッヒ二世、四世、五世の他数カ国語をあやつったカール五世までの間に連続性はみられないとのべている。聖職者にも一四世紀中葉まで書く能力はほとんどなく、騎士層にいたっては中世以後も読み書き能力はほとんど評価されず、いわゆる騎士文学と称するものの多くも文字とかかわらぬものであり、作者の多くも後代においてすら読み書きができなかった。こうしたなかでユダヤ人のばあいはごく普通の人でもヘブライ語の読み書きができた点で注目に値する。また商人も早くから商人学校をつくり、かなり読み書きができるようになっていた。⁽⁴⁾全体としてひとつの都市の人口の一〇〜三〇パーセントが読み書きできた

とみている。

こうした事態は学芸の未熟な段階として位置づけるだけではすまない別種の問題を提起しているのであって、その点こそが私たちの関心の的となるのである。つまり文字を媒介としない人間と人間の関係の世界から、文字を媒介とする人間と人間の関係の世界への変化がどのようにして行なわれたのかという点である。ごく大雑把に展望してみると首都が定着せず、首都らしきものがあつたばあいでも、国王が王国を一生の間旅しつづけていた時代がまさにわれわれの研究対象となる時代である。交通事情が悪く、治安もよくなかった中世の全時代を通じていかなる王も王国の隅々から税を首都へ送らせることはできなかったから、宮廷そのものを移動させ、数千人に及ぶ家臣や貴婦人、職人を引連れて各地に滞在して税を消費して歩き、自らの人格を直接に人民に刻印したのである。⁽⁵⁾最近H・J・ファイの研究によってブランドンブルク辺境伯(一一三四〜一一一九)のばあいも数代にわたって同様な事態が確認されており、⁽⁶⁾国王や伯の旅は統治の必須の手段でもあった。一六世紀になると領邦君主は特定の城や館に定住し、恒常的な旅の生活を放棄す

るようになる。この頃になってようやく世俗君主の統治手段として文書が決定的な役割を果すようになり、行政を担当する官僚が大量に形成されてくる。

このような状況のなかで私たちの関心をひくのは、民衆が文字や文書とどのようなかわりをもっていたのかという点である。ヴェンデホルストの展望のなかでもせいぜい商人層が問題になるにすぎず、職人層や下層民などは視野の外におかれている。しかしながら最近盛況をみせつつある宗教改革史研究においては特にピラ *Flugschriften* の問題が注目を集めつつある。⁽⁷⁾ ゴータのシュロスムゼウムにある宗教改革期のピラ五〇点その他多くの蒐集が印刷・刊行されつつある。⁽⁸⁾ ところが中世後期の都市下層民のほとんどが文盲であったとするならこれらのピラはどのようにして民衆に新しい福音を伝える媒介物たりえたのかという問題が生じてくる筈である。職人層や都市下層民も宗教改革期に少なからぬ役割を演じているからである。まさにこの点について R・W・スクライブナーは注目すべき視点を提示している。⁽⁹⁾ 彼は口頭の伝承、視覚を通しての伝達、コミュニケーションとしての行動の三つの面において宗教改革の思想は民衆の間に

浸透してゆき、その際にピラが決定的な媒体となったとみている。つまりピラは市場や居酒屋で読みあげられ、討論するための素材として書かれているのであり、実際多くのピラにこのことが明言されている。宗教改革と農民戦争のち、あるいはミュンスターの一揆のち捕えられた人びとが目に一丁字ない身でありながら審問官の前で滔滔と自らの信ずるところを述べているのも書物を黙読して得た知識ではなく、人から人へと渡ってきた一枚のピラを中心にして大勢の人びとが長時間にわたって居酒屋などで議論した結果身につけていった知識と確信なのであり、このような口頭伝承と絵画やプロセツション、合唱などの中世以来の重要なコミュニケーションの手段のなかで宗教改革期にピラが大きな位置を占めることになったのである。この点を指摘したスクライブナーの研究は宗教改革期のみならず中世後期の民衆と学問、民衆と信仰の問題についても重要な視点を与えるものといえよう。いわば文書のみによらない多様なコミュニケーションの形態があった中世都市や農村における研究にも示唆を与えるものといえる。

(1) 贈与から売買への転換という観点から中世社会をとら

えようとする見方はいまだ一般的なものとは見えなう。しかしながら近年このような考え方に近い論著もいくつか現われている。私自身の基本的な考え方の全体は別の機会に詳論する予定であるが、すでに『中世の窓から』(朝日新聞社一九八一年)や『中世の風景』上下(網野善彦、石井進、樺山紘一氏との共著、特に下巻の「あとがき」参照。中公新書一九八一年)でスケッチをしておいた。このような考え方に近い論著としてはむしろあたり Little, L. K., *Religious Poverty and Profit Economy in Medieval Europe*. London 1978. Duby, G. *Guerriers et paysans VII-XII^e siècle. Premier essor de l'économie européenne*. Paris 1973 pp. 60ff. などがある。

(2) この問題については一九八一年十一月に一橋大学社会科学古典資料センターにおいて「ある文書館の歴史について」と題して講義を行なった。人と人との関係のなかで文書が古代の呪術的な意味をもつ文字の集積としてだけでなく、生と死(死後の救い)とのかかわりにおいて人と人の日常生活のなかでの関係においても普遍的な意味をもつようになるのがまさにヨーロッパ中世における文書の独自の意味の問題である。この問題について別の機会に再び論じてみたいと考えている。

(3) Wendehorst, A., Wer konnte im Mittelalter lesen und schreiben? Protokoll über die Arbeitsragung vom 7.—10. 4 1981 auf der Insel Reichenau Nr. 245. *Scha-*

len und Studium im sozialen Wandel des hohen und späten Mittelalters.

(4) この問題については Ennen, E., Stadt und Schule in ihrem wechselseitigen Verhältnis vornehmlich im Mittlalter. *Rheinische Vierteljahrsblätter*. Jg. 22. 1957 S. 56ff を参照せられたう。

(5) 旅をする国王については古くから研究がある。例えは L. バンキヤーによる研究動向の紹介などを参照せられたう。Mayer, Th., Der Wandel unseres Bildes vom Mittelalter. Stand und Aufgaben der mittelalterlichen Geschichtsforschung, *Blätter für deutsche Landgeschichte*. 94 Jg. 1958 S. 1ff. 一般的には L. フォーヴル・ニ宮教授『フランス・ネネサンスの文明』創文社一九八一年を参照せられたう。

(6) Fey, Hans-Joachim, *Reise und Herrschaft der Markgrafen von Brandenburg (1134—1319)*. Mitteldeutsche Forschungen. 84. Köln /Wien 1981.

(7) 数多くある研究のなかの一例をあげれば Köhler, Hans-Joachim. Hrsg., v., *Flugschriften als Massenmedium der Reformationszeit*. Stuttgart 1981 などである。稿を集めたう。

(8) Meuche, H., Hrsg., v., *Flugblätter der Reformation und des Bauernkrieges*. 50 Blätter aus der Sammlung des Schloßmuseums Gollha. Leipzig 1976 2 Bde.

(6) Scribner, R. W. Flugblatt und Alphabettentum.
Wie kam der gemeine Mann zu reformatorische Ideen.
in *Flugschriften als Massenmedium der Reformations-*
zeit. S. 65ff.

二

中世後期における民衆と文字のかかわりという問題を考えるとき、宗教改革期におけるピラの位置づけと並んで重要なのは年代記や自伝の分析である。ピラ程社会のダイナミックな動きを伝えているわけではないが、都市市民や放浪学生あがりの聖職者や人文主義者が綴った自伝は経済史のみならず、あらゆる分野の生活を描写しており、とりわけ放浪学生や市民層の生活意識を反映している点で社会史研究の格好の史料とみななければならないだろう。

数多くある自伝のなかからここではまずトマス・ブラッター(一四九九?—一五八二)とブルカルト・チンク(一三九六—一四七四/五)の自伝をとりあげてみたい。⁽¹⁰⁾いずれも貧しい庶民の出であるが、後世の私たちがこの時代の人びとの生き方を知ろうとするとき何ものにもか

えがたい叙述をのこしてくれた人物である。ブラッターは息子フェリクスにあてた自伝を七十三歳の一五七二年一月二八日に書き始め、一六日間で書き終えている。その概要を一七二四年のチェーリッヒ版 *Historia vitae Thomae Plateri* によって述べてみよう。ブラッターはスイスのヴァリスのヴィスブ教区のグレンヒェン村に生れ、父はアントニ・ブラッター、母はアンティリ・ズンメルマッターといい、母方の祖父は百二十六歳に達しており、その死の六年前にトマスもこの祖父と話をしている。この祖父は百歳のときに三十歳の嫁を娶り、息子をもうけているのである。

トマスが生れた時、母親の乳の出が悪く、牛の角の容器に入れた牛乳を飲んで育った。「自分は母乳を飲まなかった。……それが私の苦難のはじまりであった」と書いて⁽¹¹⁾いる。トマスの父はトマスが生れたあとすぐに死んでしまった。この地方では冬の前に夫がベルン地方で織物の原料を買い込み、妻たちがそれで冬の間に農民のための上衣やズボンを織って生計のたしにしていた。トマスの父も原料の買付けに出かけたときに疫病にかかって死んでしまった。母はすぐに再婚し、子供たちは散り散

りになった。末っ子だったトマスは伯母に貰われていった。

六歳になると山羊飼いとして働かされ、八歳まで山の岩の間で約八〇頭の山羊の番をした。峻険な山地で跳びまわる山羊の番をすることは六歳位の少年には容易なことではなく、何度も谷底におちて死にかけたり、山羊が行方不明になって家に帰れず、山の上で凍えながら夜をあかしたこともあった。

やがて牛飼いとなり、九歳半位のとくにある司祭の許で文字を学ぶことになった。ところがこの司祭が怒りっぽい男で、トマスの耳をひっぱって席からひきたててはなぐったから、トマスはナイフでさされた山羊のようになり、悲鳴をあげ、近所の人は司祭がトマスを殺そうとしていたのでないかと思つた程であった。ちょうどその頃、兄のパウルス・ズンメルマッターがたまたま帰国して来た。パウルスはウルムやミュンヘンの学校へ行つていたのである。殴ること以外に何も教えてくれない教師から逃れてトマスはパウルスの子分となり、ルツェルン、チューリヒを経てマイセンへの旅に出た。これは放浪学生 Baechanten とひよっ子 Schützen の関係であり、のん

だくれとこそ泥の手先とも呼ばれていた。

故郷をはじめ出て出たトマスにとつてすべては目新しいことばかりであった。マイセンでは学生には自由に農家の家鴨をとることが許されていると聞かされて、あるとき家鴨を盗み、村人から追いたてられ、また物乞いをしたり、歌を唱っては兄貴分のパウルスの食事までトマスが一人で稼がねばならなかった。放浪学生は十歳前後のひよっ子を親から預り、学校を歴訪させると約束するのだが、その実幼い子供を家々の軒先に立たせて物乞いさせ、自分は稼がずに女に夢中になったりしていたのである。⁽¹²⁾ トマスも村道のぬかるみの中を一軒一軒廻つて喜捨を求めて歩いて戻ると乾いた国道のところまで待っている。パウルスに貰つた物すべてを渡さねばならない。パウルスはトマスに水をいっぱいふくませて容器に吐き出させ、食物のかすが一片でも残っていると容赦なく殴る、蹴るの暴行を加えたのである。ほぼ同時代の人文主義者ヨハネネス・プツバッハの『放浪学生の手記』にも全く同様な記述があり、⁽¹³⁾ この頃の放浪学生とひよっ子のこのような関係が一般的なものであったことが解る。

ある町でひよっ子があまりにみじめな姿だったので、

哀れに思った人が服地を一着分施してくれた。パウルスはこの服地をひよっ子にもたせて家々を廻らせ、「布地はあるのだが、仕立代がないので恵んで下さい」といってほぼ一年間もこうした仕方て多くの家から仕立代を貰って歩いた。うかつにも一年後に立寄った家で、「一年前に仕立代をあげたのにあの布地をまだ仕立ててないのか」といわれてしまうまで、こうして彼らは稼いだのである。⁽¹⁴⁾

一年中飢えと寒さに悩まされ、生の玉葱や焼いたカスターニーエの実などを食べて野天で夜をあかし、犬をけしかけられて追い出されることもしばしばあった。なかには哀れに思ってトマスを養子にしようとした豊かな市民もいたし、兄貴分のパウルスからかばってくれた肉屋のおかみさんもいた。また凍えたトマスの足を温めてくれた人もいた。これらの人びとの情けによって少年は生きながらえたのである。

トマスは兄貴分のパウルスからは何ひとつ学問は学ばなかったし、パウルス自身放浪の生活のなかで勉学の方角も意志も失っていたらしい。しかしトマスの自伝から当時の学校の様子を知ることができる。トマスらが訪れ

たプレスラウは七つの教区に分れていて、各教区に学校があり、千人もの学生がいたという。この町でトマスは一冬に三度も病気になるが、学生用の病院があり、一人につき一週間に一六ヘラーの傷病手当が出されていた。十分な看護をうけ、ベッドも良かったが、虱だらけで、トマスはいつでも胸のなかから三匹の虱をとり出すことができたという。⁽¹⁵⁾

やがてミュンヘンでトマスはついに兄貴分のパウルスの支配下をのがれ、一人で南へ下っていった。重要な働き手を失ったパウルスが追跡してくるのを予知して各地を逃げまわり、やがてシュレットシュタットに來た。そこでヨハネス・サビドゥス(一五三一)の学校に入学を許可されたときには十八歳になっていたから、トマスは鶏の群のなかの牛のように小さい子供のなかで学んだのである。これがトマスにとって最初の学校となった。まだドナトゥス(ラテン文法書)さえよめないトマスにとっては新たな、しかし希望にあふれる苦勞のはじまりとなった。ところがサビドゥスの名を慕って集まる多くの学生のためにこの町での生活が困難となり、トマスはゾロトゥルンを経由していったん故郷に帰り母に再会す

る。

そののちチューリッヒのフラウエンミュンスターの学校に入るが、ちょうどその頃すぐれた学者がアインジーデルンから来るという話があった。そこでトマスは講義室の一角に席を占め、「ここで学ぶか死ぬかだ」と自分でいきかせて学業への決意を固めた。その教師がニコニウスであった。トマスはドナトゥスを暗記し、そののちローマの喜劇詩人テレンティウスの作品をよみ、やがて聖書もよんだ。ニコニウスはトマスを助手として家に連れて帰り、食事を共にしながらトマスの遍歴の話をお聞きしたのであった。

こうしてようやく少年時代に過ぎた無駄な時間を取戻しつづつあったが、このときトマスはすでに二十六歳にもなっていた。他の少年たちと同じように街頭で歌ったり、物乞いをして歩くわけにもいかなかったので、綱作り職人となり、生活をたてていたのである。昼間は働かねばならなかったトマスは、夜になると親方や仲間の職人が眠っている間に、冷たい水を飲み、生の燕をかじり、口のなかに砂を含んで睡魔と戦いつつラテン語、ギリシア語、ヘブライ語などの勉強をつづけていたのである。綱

具職人としての修業を終えると遍歴の旅に出て、パージェルで、ある親方の家に住みこみ職人として働かれた。昼間は職人として働かねばならなかったから、勉学の時間が足りず、トマスはプラウトゥスの書の頁を亜麻布の束にはりつけ、仕事をしながらよんでいた。こうしている間にトマスの学者としての名が高くなり、仕事場にベアトゥス・レナーヌスが訪れて綱具職人をやめて他の職につくようにすすめてくれたが、実現しなかった。

あるとき仕事場にパーゼルの印刷業者オポリヌス(一五〇七と六八)が現われ、ヘブライ語を教えてくれるようにトマスに頼んだのである。トマスは時間がないからと固辞したのだが、ついにオポリヌスの熱意に負けて親方に給料を減額してもらい、夕方の四時から五時までの一時間の暇を貰って、教会に出かけていった。ところがそこにはオポリヌスだけでなく、一八人もの学者が待ちうけていたのである。それを見てトマスは怖れをなして帰ろうとしたのだが、オポリヌスに説得され、以後毎日一介の職人が多くの学者を前にしてヘブライ語の講義をする光景がみられたのである。やがてトマスはパーゼルのギムナジウムのギリシャ語の教師となり、かたわらオ

ポリヌスらと印刷所をつくり、カルヴァンの書物等を出版するようになる。

トマスの自伝にはこの他にツヴィングリとの出会いや、ある町でチューリッヒからやってきたトマスと旧教派の司祭との間で論争が行なわれる場面や、トマスの食事の内容、さらに最初の妻の死後七十三歳で再婚し、この結婚で四人の子をもうける話など極めて多様な場面が描かれており、当時の素朴な人びとの間に宗教改革の思想が浸透してゆくあり様がよく解るように描かれている。部屋を暖めるために聖ヨハネの木像を教会から黙って失敬してきて薪にして燃してしまふあたりの叙述も含めて、この時代の自伝としては異色の内容を豊かに含んだ記録となっている。この点でも社会史の史料として極めて重要なものである。

スイスの山間の貧しい農民の子であったトマスが何故他の遍歴学生のように自堕落な生活に陥ることなく、職人としての生活の間に刻苦して語学や古典の学業に精を出しえたのか。一体この時代の人びとにとって古典とは何であったのか。こういった問題に対してはこの自伝を全部よんで検討してゆくなかでおのずと答がでてくるで

あろう。私はここでその答を出すことを控えておきたい。ただひとつ指摘しておきたいことは、この時代の民衆がすべて文字に無縁であったわけではなく、また日常生活のなかでたとえ飢えや寒さをしのぐことができたとしても、それだけでみたされていたわけではないということである。身近かなところでの欲望の満足をこえたところに、少し遠くをみようとするとする気持ちがあるが、その方向は人によってさまざまであろう。この時代の民衆の生活と文化、宗教とのかかわりを調べるためにはその点をおさえておかなければならず、そのためにはトマスの自伝は格好の材料となるであろう。

- (10) *Historia vitae Thomae Plateri. Quam ipse describere coepit. An. 1572. 28. Januarii, et 16 diebus absolvit. in Miscellum. Zurich 1724.* トマターの自伝にはこの他に数多くの版がある。翻訳を試みるべきにはこれらの版の間の違いについて十分な検討を加えねばならぬだろう。Fechter, A., *Thomas Platter und Felix Platter. Zwei Autobiographen.* Basel 1840. Hartmann, A. *Thomas Platter. Lebensbeschreibung.* Basel 1944. Homan, R., *Thomas Platter's Selbstbiographie. 1882. Autobiographie traduite par M. Helman.* Paris 1964. *Chronik des Bar-*

- kard Zink. 1368—1468. *Die Chroniken der deutschen Städte 5.* (1866). チンクに関する研究は以下(11)が主である。Miller, A. M., *Burkard Zink, der Augsburger Chronist. Sein Leben und sein Werk.* 1948. Schmitz, K., *Die Augsburger Chronik des Burkard Zink. Eine Untersuchung zur reichsstädtischen Geschichtsschreibung des 15. Jahrhunderts.* Diss. phil. München 1958
 (11) Thomae Plateri. S. 212.
 (12) 放浪学生的生活のこころは Spiegel, N., *Das fahrende Schülertum. Ein Ergebnis der deutschen Schülerverhältnisse während des XV. | XVI. Jahrhunderts.* Beilage zum Jahresbericht des K. Alter Gymnasiums zu Würzburg. 1904. S. 63ff. を参照せよ。
 (13) Butzbach, J., *Chronica eines fahrenden Schülers.* Regensburg 1869. p. 26.
 (14) *Thomae Plateri*, S. 238f.
 (15) *Thomae Plateri*, S. 232f.
 (16) *Thomae Plateri*, S. 249.
 (17) *Thomae Plateri*, S. 272.

III

民衆と文字との関係についてトマス・ブラッターのばあいとは全く異なった脈絡において関心をそそるのは、

アウクスブルクの商人ブルカルト・チンクの自伝である。チンクは一三九六年にメミンゲンの商人あるいは手工業者⁽¹⁸⁾の子として生れ、四歳のときに母を失い、トマスとは同じ十一歳のときにクラインにいる伯父を頼って家を出た。父が一四〇四年に再婚し、継母との仲がうまくゆかなかつたためである。その後クラインのライバッハ南東にあるライスニッツで七年間学校に通ったが十八歳のとき故郷に戻り、学業を中断した。しかし父も継母も死に、財産もなく、クラインの伯父も死んでしまった。初恋にも破れたチンクは再び学業をつづける希望を失い、手工業者となる決心をして毛皮工となろうとしたが、二週間でそれもあきてしまった。そこで再び放浪学生となり、はじめは聖職者になることも頭に描いたらしいが、アウクスブルクやニュルンベルクの商人の許で働き、バンベルクでは聖界裁判所の書記の地位を得たらしい。この頃まではしばしば職業をかえていたが、アウクスブルクに一四一九年来て、ヨス・クラマーの許で働き、ヴェネチアの支店で働くようになってからはチンクの将来の方向が固まりつつあった。

チンクは一四五〇〜六〇年代に年代記を書き、一三六

八年から一四六四年までを扱っている。第一巻は一三六八年のツンプト制の導入から一三九七年までのアウクスブルク年代記を編集したものであり、第二巻(一四〇一

一四六六)と第四巻(一四一六―一四六八)は自らの見聞や口頭伝承などをおりませて一般史の叙述を試みている。第三巻は自伝で、出生から一四五六年までの出来事が描かれている。このような構成の点ですでにチンクの年代記はブラッターの自伝ともまた他のドイツ都市の年代記(例えばアウクスブルクの市参事会員H・ミューリヒの年代記)とも異なっている。トマス・ブラッターは自己の体験を息子のフェリクスに伝えるという叙述の形をとって、その限りでまさに彼の経験は自己の体験に裏づけられており、信仰の問題においても同じことがいえるだろう。チンクのばあいも自己の体験を語っているのだが、少年時代から職業の選択と実践、アウクスブルクにおける成功、結婚、そして子供の出生と死などを伝えながら、それらをアウクスブルクの町の歴史と密接に絡みあったものとして叙述している。⁽¹⁹⁾ チンクは一四四〇年にアウクスブルクの市民権を得ているが、H・シュミットの言葉を借りれば「チンクはそのときアウクス

ブルク市の特権を自分のものとして受容れ、一人の人間としてアウクスブルクに住んだのではなく、アウクスブルク人となった⁽²⁰⁾」のである。

その点に注目するならチンクの年代記は中世後期の一人の都市市民の生活を知るうえで貴重な資料となるだけでなく、当時の人の政治意識の世界を知るうえで注目すべきものといえる。さらにチンクはE・マッシュケが詳細に検討しているように妻との共稼ぎ生活の収支を詳しく記録しているために、当時の一市民の生活の具体相とその変化、物価の変動なども知ることができ、貴重な材料を提供しているのである。以下においてはチンクの自伝のなかから注目すべきいくつかの点を紹介してみよう。一四一九年にチンクはアウクスブルクにきてヨス・クラマーの許で働いていた。クラマーははじめ織匠のツンプトに属していたが、のちに商人としてヴェネチア取引で財をなしていた。翌年二十四歳でチンクは貧しい寡婦の娘と結婚したが、花嫁が持参したものは、小さなベッドと小牛、鍋程度のものであって、全部でも一〇 Pfund・プフェニヒ程度の価値しかなかったという。マッシュケは結婚当時の二人の財産は全部で $8\frac{2}{3}$ ライ

ン・グルデン程であったとみている。⁽²¹⁾ チンクの妻エリーザベトはクラマーの家で働いていた女であった。チンクもクラマーの職人であったから結婚にはあらかじめクラマーの許可を得なければならなかったが、それをせずに結婚してしまったためにチンクは解雇され失業してしまふ。どうしてよいか不安をいっていたチンクに、若い妻は「私のブルカルト、元氣を出して。絶望しては駄目よ。助け合えばうまくゆくわよ」といって慰めたという。実際彼女自身一週間に四プフントの羊毛を紡いで三二デナリウスを稼ぎ、チンク自身はある聖職者のために写本をして、一週間に一六ボヘミア・グロッシェンを稼いだ。チンクの記述では当時一ボヘミア・グロッシェンは「*12*」デナリウスであったから一二〇デナリウスとなり、二人で一五二デナリウスを稼いでいたことになる。この数字は当時の他の職種の職人と比べてみたとき決して低い額ではなかった。マッシュケの計算によると一四二一年のアウクスブルクの建設業親方の賃金は週九六デナリウスであったからチンク夫妻の方がはるかに高い額を稼いでいたことになる。⁽²³⁾

若い二人はどのような家に住んでいたのだろうか。一

四二一年の租税帳簿にはじめて登場するチンクはフォン・ディーポルトの名の下に書かれており、借家人であったと推定される。一四二九年の租税帳簿においても家主の次の「*13*」項目の下にチンクの名だけが書かれており、二人だけで借りていたと考えられ、小さな家だったと想像される。⁽²⁴⁾

チンクの筆写の仕事は三カ月程で終わってしまうが、クラマーが一四二一年末に努力家のチンクを再び備ってくれた。以後のチンクの活躍は目覚ましい。一四二一年に二五グルデンの収入をあげ、一四二四年には約二九三グルデンにも達し、一四二八年には六六一グルデンとなっている。もとよりクラマーから固定給を得た他に一四二二年の戦争では市の傭兵として一日四グロッシェンの給与をうけ、一〇カ月で一〇〇グロッシェン(九〇〇デナリウス)の収入をえた。そのうちほぼ半分の額を節約し、貯金にまわしている。⁽²⁵⁾ その他にクラマーの仕事を手伝ってヴェネーチアに赴き、そこで主人のために働くと同時に自ら独立して取引も行なっている。

しかしながらチンクは三十五歳の時にすでに商人としての仕事に疲れてしまった。「すでに私は一四三一年の

頃にもう十分に富んでいたし、馬に乗って旅をすることに疲れ、町のなかで、そう激しく働かなくてもすむ仕事につきたいと思った⁽²⁶⁾と書いている。貧しい出身の男が結婚当初の財産を数倍にしたとき、すでに自分は十分に豊かだと感じる事ができたのである。一四三一年に市の秤場の仕事を手に入れ、年五三フローリンの給与をえた。求めていた地位を手に入れたのである。にもかかわらずチンクは年に少くとも一〜二回はヴェネチアへ赴き取引を行なっていた。そればかりか、儲ける機会があればのがさなかった。一四三三年にP・エーゲンが家を建て替えた際に二〇〇シャフ(二〇五・三リッター)の裸麦を一シャフ当り一八〇デナリウスで売り出した。ところがその二週間前の価格は同じ量につき一二七・五デナリウスだったのである。そこでチンクも手持ちの裸麦を売り、一六グルデンを儲けている。そのうえチンクはもっと値上りがつづくともてエーゲンから一〇シャフの裸麦を買い、さらに儲けている。

旅にあきて落ち着いた生活がしたいと願って秤場の管理人を勤めながらときに商取引を行なったのは一四三一年から一四三八年までの七年間だが、その間にチンクの財

産は急速に増加している。一四三五年にはほぼ七〇〇グルデンにのぼっていた。一四三八年には秤場の「安定した」生活にもあき、管理人の職を辞し、再び活潑な商人の生活に全力を傾けることになる。秤場をやめた頃にはすでに財産は一〇〇〇グルデンになっており、一四四〇年にチンクは二〇〇グルデンで家を買⁽²⁷⁾い、増築している。中世都市の商人が家を買うということは安住の場所を得るためばかりではなかった。チンクはこの年にアウクスブルクの市民権を得ているから、家の購入はそのための条件であったとも考えられるが、それだけでもなかった。当時の商人は商取引から上る利益の一部を家などの不動産に投資して一種の準備金にあてていたのである。だからチンクのばあいも四年後にはこの家を三〇〇フロリンで売って、大きな利益を得ているのである。同年にチンクはユーデンガッセに家を買って移っている。

一四四一年にはチンクは当時著名な商人ハンス・モイティングの商会に入り、この頃からチンクの財産は急激に増加してゆく。毎年二〇〇グルデン程の収入を得、一四四八年には一一三五グルデンと生涯最高の収入を得ている。

チンクが家を買ひ、市民権を得た一四四〇年の一〇月に糟糠の妻が死んだ。二人の間には九人の子供が生れたが息子の一人は幼くして死亡し、結局四人しかのこらなかつた。一四四一年にチンクは貧しい貴族の寡婦と再婚した。このときチンクは四十五歳であつた。新しい妻も前の妻のばあいと同じくほとんど持参するものがない貧しい女であつた。「ベッド用シーツのないベッド二台、足のとれた長持、狐の毛皮の敷物だけであり、彼女はマントもヴェールもなく、息子一人と娘一人をつれてきたが二人とも裸であつた」とチンクは記している。チンクの最初の結婚で生れた子供のうち三人はまだ独立していなかったから、こうして七人家族となつた。第二の妻は「美しく、敬虔で、貞節であり、熱心に糸を紡ぎ、子供の世話をした」といふ。一四四一年頃でも七人家族の生活には年一〇〇グルデンあれば快適なものであつたと考えられる。

一四四九年には二度目の妻も死去し、チンクは四年半の間鰥夫暮しをしている。その間にチンクは娼婦と付合つていたが「彼女は愛らしかつたが、私に大きな損害を与えた」と書いてある。この娼婦との間に二人の子が生

れた。チンクが別れようとするこの女は結婚を迫り、裁判所に訴えた。しかし婚姻裁判所はその訴えを却下した。一四五四年にチンクはある商人の娘と結婚し、四人の子をもうけた。五年間は幸せに過したが妻がまたも死去し、六十四歳でチンクは四度目の結婚をした。この結婚はチンクには失敗で、新しい妻は怒りっぽく反抗的であつた。チンクはあきらめて「この女にはしたいようになさせておくことにした」と書いてある。

チンクは生涯の間に一四四〇、一四三三年と一四五六年に持家に住んだだけで、あとは借家に住んでいた。転居回数も多く、三五年間に一〇回も家移っている。一四五七年以後は死ぬまでチンクは転居せずに一軒の家に住んだ。こうした点にも放浪と定住の間をゆれ動いていた市民の生活の一端をみる事ができる。秤場に官職を得て落着こうとしながらも商用旅行から足を洗うことなく、すぐに定住の生活にあきてモイティングの商会に入つて商業に身をのり出してゆくチンクは、他方で秤場の管理人を勤めながら自分自身のためにラテン語の文章を筆写していた。イソップの寓話の狼と四頭の牛の話や帝国都市と諸侯の話になぞらえて書いてある。また一四四八年

に激しい嵐がアウクスブルクを襲ったときにもラテン語の詩を書いている。

バルヘントやサフラン、胡椒の取引でかなりの財産を貯え、ヴェネチアやロードス島まで商用旅行に出かけていた商人チンクが同時に年代記や自伝、さらにラテン語の詩まで書いていたため、J・シュトリッダーなどはチンクを当時の他の商人と比べて必ずしも典型的ではなく、商業活動からすぐに引退して文学活動に入った人物として紹介している。⁽³²⁾しかしそう単純に言いきることはできない。この時代の都市にはチンクの他にも同じアウクスブルクのルーカス・レムやアントン・トゥヒャー、『ティル・オイレンシュピエゲル』や年代記を書いたブラウンシュヴァイクの徴税書記ヘルマン・ボーテなど、自伝や家の歴史その他の作品を書いた数多くの市民が出ているからである。⁽³³⁾

バルヘントの価格の変動や通商路についての知識はマッシュケがいうようにチンクが商業に熱心な関心をよせており、商人として十分な能力をもっていたことを示している。にもかかわらず商人としての旅にあきて秤場の官職につくチンクが、文学に専念するために商業を捨てた

のではないことは以後も商業を独力で営んでいることからも明らかであろう。旅と定住の間をゆれ動く人間像、これこそ中世商人の典型なのであって、その点ではチンクもまさに中世の商人なのである。また三十五歳でささやかな財産が出来ると「もう十分に豊かだ」と判断して、あくことのない富の追求とは異なった道を歩もうとする。中世商人の一人として収入に対するチンクの欲望も限りあるものであった。その限度はいわば社会的に設定されていたともいえる。マッシュケの言葉を借りればチンクは「商業で利益を得、節約を重ねて財産を蓄えても一大財産をなすわけではない大多数の中・小商人の一人である。彼らはある種の安定を求めたのであって能力においてだけでなく、欲望の点でも収入の増加に自ら枠をはめていたのである」⁽³⁴⁾

チンクのこのような生活態度は中世の市民、特に商人の生活感情を示しているといえよう。しかしながらかつて彼が仕えた市長P・エーゲンが市と対立し、エーゲンが敗れてその家が壊され家財が非常に安価に売却されたとき、チンクはそれらを買おうとはしなかった。⁽³⁵⁾このような彼の人となり但凡人のものであったとはいえない。

そこにこそマッシュケがいうように彼の個性があったといふべきであろう。

もうひとつの特徴はチンクがその自伝のなかで家族の死について詳細に報告している点である。母と父、姉妹、妻、子供の一人一人について死亡の年と月日、年齢、ときには墓所などを詳しく記している。このような記述はチンク以外にもみられるが、彼のばあいとくに自分とかかわりが深かった者への思いがこもった文章となっている。³⁶⁾

一四四七年の五月二六日にチンクがヴェネチアから荷を積んでインスブルックに向う途中ミッテンヴァルトのなかで突然雪が降り出した。雪は二日二夜降りつづき、森も家々も雪の下に埋まってしまった。そのときチンクは森の小鳥たちのことを何よりもまず気にかけていた。小鳥たちは人家の近くまでとんできて、ミッテンヴァルトの中を流れる小川の乾いた石の上に疲れはてた翼を休めていたので誰でも容易に捕えることができた。ある若者は三〇羽も捕えた。チンクは捕えた小鳥たちを二階の暖い部屋に放って自ら穀物を与え、雪が晴れてから森に帰してやった。このような記述が年代記第四巻にある。³⁷⁾ マッシュケはこの叙述を中世で最も美しい動物愛護の描写

だと述べているが、チンクはそれを神の摂理として受けとめている。その説明がどのようなものであれ、エーゲンの財産の競売の際の行動と同じく、そこにはチンクという男のこまやかな心の動きと人間の信義に対する思いが示されており、いずれも個性的なものであることはいうまでもない。ただその個性を自ら文章で表現することができる時代が始まっていたという事実はおさえておかなければならない点である。

都市年代記や商人の自伝はこれまで良く知られていたにも拘らず、十分に利用されているとはいいがたい。本稿では十分に分析しえなかつたが、当時の放浪学生の手記や市民の年代記、特に家の記録は当時の人びとの家と国家・社会との関係を知るうえで極めて重要なものである。アハスフェル・フォン・ブラントのリューベック市民の遺言書などの研究を重視したマッシュケの研究にみられるように、これらの史料を用いて中世市民の家意識の構造を探る試みが生れつつある。またH・シュミットがかつて行なったように、中世市民の国家・社会並びに空間と時間に関する意識の構造を、これらの年代記や自伝からよみとってゆく作業もまたはじまりつつある。もと

より自伝のばあい記述の信憑性には常に問題があるから、これらの叙述を社会史研究の史料として用いる際にはそれなりの方法、特に文献批判の方法をきたえておかねばならないことはいうまでもない。西洋社会史の研究分野には中世後期の一部分だけをとりあげても、これ程の魅力的な分野が広がっている。未開拓のこれらの分野は単に経済史や政治史、法制史に限定されることなく、文学や哲学にも開かれており、のびやかな心をもった若い研究者を待っているのである。

- (87) チントは父の職業にうごてはじきつとはあやういなる
くたご gewerbig man und arbeitet auf der Steirmark
(Chronik des Burkard Zink: 1368-1468. Buch III S.
122) の書づつらるから商人とさるやあやういなる。
- (87) Schmidt, H., *Die deutschen Städtechroniken als Spiegel des bürgerlichen Selbstbewusstseins im Spätmittelalter*. Göttingen 1958 S. 30.
- (88) Schmidt, a. a. O., S. 31
- (88) Maschke, E., *Der wirtschaftliche Aufstieg des Burkard Zink (1396~1474/75) in Augsburg, Festschrift für Hermann Aubin zum 80. Geburtstag*. Bd. 2. Wiesbaden 1965 S. 239 なき本稿の叙述の多くをトニョナの論文に負つてゐる。

- (22) Chronik des Burkard Zink. Bd. III. S. 129
- (22) Maschke, a. a. O., S. 240
- (22) Maschke, a. a. O., S. 240
- (22) 当時の換算では一ノイン・タルテンは一四一チナリウスであったから、傭兵としての収入は約六三・一タルデンとなり、そのうち約三〇タルテンをチンクは貯金している。
- (26) Chronik des Burkard Zink. Bd. III. S. 132
- (27) Chronik des Burkard Zink. Bd. III. S. 133
- (28) Chronik des Burkard Zink. Bd. III. S. 139
- (28) Chronik des Burkard Zink. Bd. III. S. 139
- (28) Chronik des Burkard Zink. Bd. IV. S. 313
- (27) Chronik des Burkard Zink. Bd. IV. S. 229
- (27) Strieder, J., *Zur Genesis des modernen Kapitalismus*. Leipzig 1904. 2 Aufl. 1935. S. 181
- (23) *Tagebuch des Lucas Rem aus den Jahren 1494 bis 1541*. Ein Beitrag zur Handlungsgeschichte der Stadt Augsburg. B. Greiff. 26. Jahres-Bericht des historischen Kreis Vereins in Regierungsbezirke von Schwaben und Neuburg für das Jahr 1860 (1861). *Anton Truchers Hausaltbuch (1507 bis 1517)*. hrsg. v. Wilhelm Loose. Bibliothek des Litterarischen Vereins in Stuttgart. Bd. 134 (1877) 拙稿「チント・オイントニョナ・ユーゲル——文献学から社会史へ」『思想』六六三号一九七九年。
- (24) Maschke, a. a. O., S. 260

- (25) Chronik des Burkard Zink. Bd. IV. S. 276
- (26) Chronik des Burkard Zink. Bd. III. S. 135f.
- (27) Chronik des Burkard Zink. Bd. IV. S. 183f.
- (28) Maschke, a. a. O., S. 261
- (29) Brandt, Abasver von, Mittelalterliche Bürgerestamente. *Sitzungsberichte der Heidelberger Akademie der Wissenschaften*. Phil.-Hist. Kl. Jg 1973. 3. Abhandlung.
- Maschke, E., *Die Familie in der deutschen Stadt des späten Mittelalters*. Sitzungsbericht der Heidelberger Akademie der Wissenschaften. Phil.-Hist. Kl. Jg. 1980 4. Abhandlung. Heidelberg 1980 S. 17f.
- (30) 前掲〔註(29)〕註釋を参照せよ。
(一橋大学教授)